



昭和27年10月号 / 柳下基雄



昭和28年5月号 / 小島源太郎

春燈



昭和32年5月号 / 川上源生



昭和33年2月号 / 横方古功



昭和40年5月号 / 岡田謙雄



昭和43年2月号 / 小島源太郎



昭和45年5月号 / 森田研一

久保田万太郎

60
周年記念号

春燈六十周年記念号刊行にあたって

鈴木榮子

平成十八年三月号をもって「春燈」は六十周年を迎えることになりました。これもひとえに安住敦先生が、「春燈」発刊に際し、日頃敬愛してやまない久保田万太郎先生を主宰に仰ぎ、所謂春燈調なる作風を確立したご努力と、また安住先生没後第三代主宰となられた成瀬櫻桃子先生の並々ならぬご指導により、ゆるぎない春燈の礎が確立された上でのことと存じます。

昭和二十一年焦土の中に「抒情の灯」を掲げ、久保田万太郎という稀有な主宰の下に俳誌刊行の運に恵まれた安住敦、大町紘両先生のお喜びはいかばかりだったことでしょう。万太郎先生を戴くことに到った安住、大町両先生の俳句に賭けた情熱が、万太郎先生のお心を動かしたと思われません。

万太郎俳句の繊細で、粹で、人生、人情の機微、抒情の完成度に、いまでも私達後進は、この上もなき詩情の美酒に酔うごとく万太郎句を拝誦いたして
おります。

「春燈」六十周年を迎えるに当り、現在「春燈」に学ぶ者として、今日まで手付かずにしておりました創刊以来の年譜を、六十周年を期に詳らかにし、先人の業績と「春燈」の六十年の歩みを明らかに致しました。

記念号発刊に当りましては、各界の先生方をお煩わせ致し、有り難いお言葉を頂戴し、本号にこの上ない華をお添えいただくことができました。ご芳情のほど、心から御礼申し上げます。

六十年はまだまだ緒についたばかりでございます。どうぞ今後とも旧に変わぬ温かいご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

なお、春燈の会員のみな様におかれましても、この六十周年を新しい踏み台として、なお一層のご精進の程お願い申し上げます。

平成十八年三月

久保田万太郎

1889年～1963年

主宰：1946年～1963年

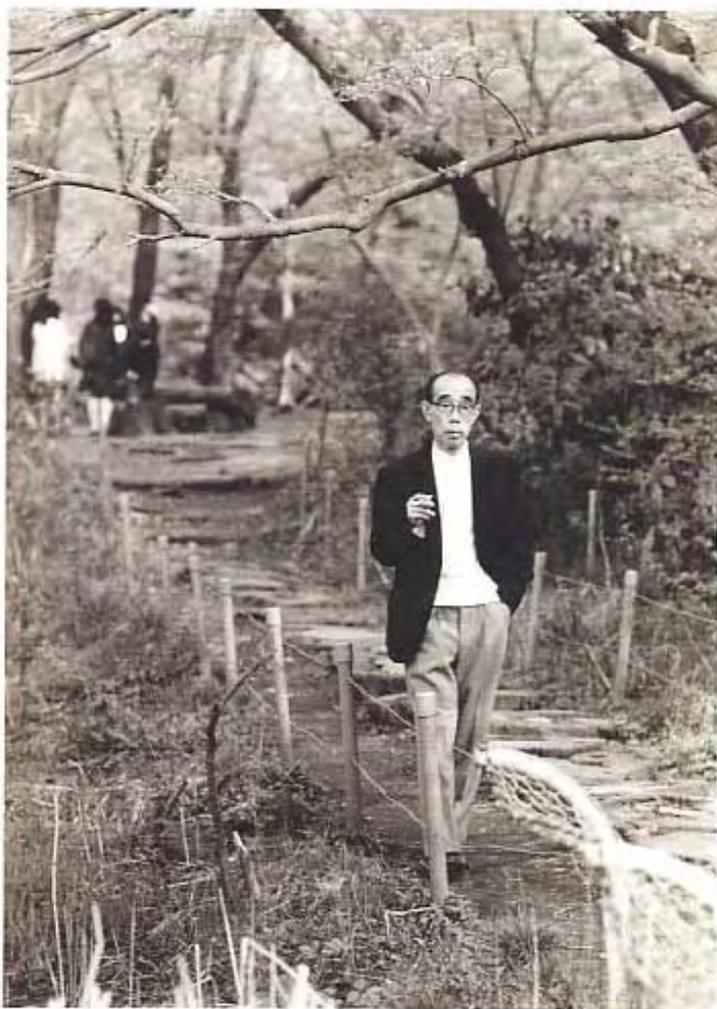


昭和38年4月、文学座にて

安住 敦

1907年～1988年

主宰：1963年～1988年



昭和46年 神文谷公園を散策中の安住敦

成瀬櫻桃子

1925年～2004年

主宰：1988年～2003年



平成4年5月 日独交流記念・俳人協会訪独旅行 バルリン森鷗外記念館前

鈴木榮子

1929年～

主宰：2003年～



跡沢榮一旧居 晩香庵にて

俳句隨筆

春燈

久保田万太郎主筆

創刊號

春燈社發行

久保田万太郎 百句

川名大選

さゝくれをとがめて春の深さかな

船打込橋間白浪

ゆく雁や屑屋くづ八菊四郎
新參の身にあかくと灯りけり

島崎先生の「生心立ちの記」を讀みて

神田川祭まつりの中をながれけり
ふりしきる雨となりにけり螢籠
もち古りし夫婦の箸や冷奴
灰ふかく立てし火箸の夜長かな
奉公にゆく誰彼や海羸廻し
海羸の子の廓ともりてわかれけり
旅中
桑畑へ不二の尾きゆる寒さかな
向島
水鳥や夕日きえゆく風の中
山茶花にあかつき闇のありにけり
双六をひろげて淋し賽一つ

竹馬やいろはにはほへとちりぐくに

大正十二年九月、浅草にて震災にあひたるあと、本郷駒込の縷紅亭に
立退き、半月あまりをすこす。諸事、夢のごとく去る。

秋風や水に落ちたる空のいろ

大正十二年十一月、日暮里渡邊町に住む。親子三人、水入らずにて、
はじめてもちたる世帯なり。

味すぐるなまり豆腐や秋の風

二階八疊と六疊、階下八疊と六疊と四疊半、外に台所に所属せる三疊
これがいまぬる渡邊町の家の間取である。このなかでわたくしの最も
好きなのは階下の四疊半である。奥まつた感じをもつてあるからであ
る。すなはちこの部屋をえらんで茶の間に宛つ。

ひぐらしに燈火はやき一ト間かな
吉原のある日つゆけき蜻蛉かな
幼稚園しぐれていまだ退けぬかな
長男耕一、明けて四つなり
さびしさは木をつむあそびつもる雪
渡邊町といふところ
したゝかに水をうちたる夕ざくら

大正十五年六月、日暮里諏訪神社まへにうつる。この家
崖の上にて、庭廣く見晴しきはめてよし。

いたづらに大沓脱や秋の暮
まつりのあとのさびしさは

新涼の身にそふ灯影ありにけり
校長のかはるうはさや桐の花
夏の蝶高みより影おとしくる
夏の月いま上りたるばかりかな
つゝみくれし麥落雁や日のさかり

昭和三年七月十四日

芥川龍之介 佛大暑かな
あきかぜのふきぬけゆくや人の中

小山内先生追悼講演會

しぐるゝや大講堂の赤煉瓦
春の夜のすこしもつれし話かな
夕蛙かんざしできて來りけり
すでにつんでゐる將棋なり雲の峰
水中花咲かせしまひし淋しさよ
箱根
みえてゐて瀧のきこえず秋の暮
買つて來しものに夜寒のさくらもち

久方の空いろの毛絲編んでをり
春の雪しきりにふりて誰もぬず
春水のみちにあふれてゐるところ
おもふさまふりてあがりし祭かな

昭和十一年七月、ことしわが家は新益なり

迎火やをりから絶えし人通り
秋出水言問團子休みけり
馳けだして來て子のころぶ秋の暮
十三夜くもるはずなく曇りけり
時計屋の時計春の夜どれがほん
と行水の湯の沸きすぎてしまひけり
冬の灯のいきなりつきしあかるさよ
雪ぞらのほのかに赤きところかな

井の頭公園附近

あしはらの中ながるゝや春の水

新京にて

馬車洋車のゝしりかはし五月來る

ハルビン、キタイスカヤ、イペリヤといへるロシア料理店にて
ゆく春や鼻の大きなロシア人

京橋木挽町のさる方にて

舟蟲の疊をはしる野分かな

大仁ホテルに滞在、戯曲「波しぶき」を執筆（二句）

十五夜の草くるぼしを没しけり
名月のたかぐふけてしまひけり

水戸街道にふるき茶屋旅籠にて

ごまよごし時雨るゝ箸になじみけり
石よけて水あたゝかに流れけり
ゆく春の耳搔き耳になじみけり

「團十郎三代」の序にそへて

みじか夜やおもはぬ方にうらばしご
夕端居よばれて立ちし一人かな

軽井澤にて

秋立つとしきりに栗鼠のわたりけり

三月十日の空襲の夜、この世を去りたるおあいさんのあ
りし日のおもかげをしのおふ

花曇かるく一ぜん食べにけり
トラックにのり貨車にのり日の盛

終戦

何もかもあつげらかんと西日中
手拭もおろして冬にそなへけり

―上京、日のくれぐゝに歸宅

これやこの冬三日月の鋭きひかり

―嘗ての日の吉原のおさださん、徳子さん、扇ヶ谷より来る。
…おなじ鎌倉にても、扇ヶ谷と材木座にては…

鎌倉の果から果の小春かな

―このごろの横須賀線の混雑、容易なことには乗れず、今
日も家は早く出たのなれど、東京に着きたるは一時すぎなり。
とてもこれでは、時間の約束はできず。

度外れの遅参のマスクはづしけり

―妹、上京、留守番なり。

いまは亡き人とふたりや冬籠
元日や海よりひくき小松原
豆の花海にいろなき日なりけり
秋の雲みづひきぐさとほきかな

銀座

ゆく年やむざと剥ぎたる烏賊の皮
ほそみとはかるみとは蝶生れけり

―一年余の間借住居より脱す。（二句）

短日の貼れてしまひし障子かな
鍋に火のすぐきいてくるしぐれかな

中村梅玉、逝く。―われら、この人の素顔さへみしことな
し。その人となり、たゞすべてうはさにきけるのみ

藝は藝人は人なり鳥雲に

鯉の幫間

横町のうなぎやの日のさかりかな
皿は皿小鉢は小鉢年の暮
十一月二十三日

あらひたる障子立てかけ一葉忌
昭和二十五年を迎へて

これやこの初湯の蓋をまだとらず
嘗て上海にて逢ひたる人々より、なだ腐に招かる。

すわりても立ちても日脚伸びにけり
歌舞伎座、三月興行に、源氏物語を上演

いづれのおほんときにや日永かな
いくたびもすわり直して寒さかな
昭和二十六年をおくる。

古暦水はくらきを流れけり
はつ午や煮しめてうまき焼豆腐

ばか、はしら、かき、はまぐりや春の雪
水にまだあをぞらのこるしぐれかな

生簀籠春かぜうけてゆれにけり
銀座の昼を行く。

忍、空巢、すり、搔ッぱらひ、花曇

昭和三十一年を迎ふ。

まゆ玉や一度こじれし夫婦仲
はつあらし佐渡より味噌のとぎけり
谷中に退院したる山田抄太郎君を訪ふ。

つゝがなく二階ともれるしぐれかな
初場所やむかし大砲萬右衛門
ズバルルはなやかなりしころよ

セルむかし、勇、白秋、杳太郎
橐駝来て寒の鉄を鳴らしけり
おのづと口にのぼりたる、四文字、三文字、五文字なり。

春待つや萬葉、古今、新古今
下田實花女史より句集、手鏡をおくられしらつゆや手かき
みのみの知るなげき、といふ句をもつてあいさつす。

かたはらに人あり、世辞にすぎずやかと。すなはち、ふた、
びベンをとりて

秋風や花鳥諷詠人老いず
湯豆腐やいのちのはてのうすあかり

鮫鱈もわが身の業も煮ゆるかな
笹沼源之助氏をしのぶ

東京の雁ゆく空となりにけり

西ヶ原日記 (十六)

鈴木榮子

松過ぎと打てば松杉と出るあはれ
一ヶ月過ぐる早さの二月なほ
深夜放送寂聴源氏も寒の内

レンジに牛乳ガス暖房をリセットす
冬の夜半このまま朝が来はせぬか
思うてゐるのか思はれゐるのかかじけ猫
東京に雪降る景の二・二六
逢ひたくば雛市に来よ鞠躬如
雛段に飾る金紙の妹背鶴
雛の宴河合白酒白く辛し

当月集

鈴木 榮子選



○ 菅 沢 陽 子

天文時計プラハに刻む去年今年

ハプスブルク家栄華の城や陶煖炉

雪女フオークより箸好みけり

名取りてふ責めを負ひたる舞初め

今年の計やや誇張して初日記

○ 太 田 佳 代 子

初雪と使りの裾に書き足せり

波の上すべる波ある寒夜かな

澄めるだけ澄んでみせたり年の空

冬の日や泣きやむ吾子の頬拭ふ

初雪や吾子の口より乳こぼれ

○ 市 川 玲 子

読初の静けき夜を奢りとす

まづ記す家移りのこと初暦

しばらくは柚子湯にひとり遊びをり

夕星にせかされてをり年の暮

歳時記に栞る枯葉の匂ひかな

○ 白 神 知 恵 子

初夢の筋書立てて眠りしが

初鏡鶴の遺伝子すこし欲し

日の丸を突いてはくぐる初雀

歌留多読む男の子いつしか変声期

肩固うしてぼつぺんを吹く娘

○ 吉 田 か ず や

つまづいて妻に抱かるる初詣

明日の靴磨いておきぬ三日かな

まだ直す原稿持ちて七日かな

松取れて皿一枚で足る昼餉

春隣りペンだこ柔くなりけり

春燈の句

鈴木 榮子選



導きの星追ひゆくや餓狼の目

東京 後藤真由美

浮寝鳥湖の憂ひに翔てずけり

ハリー・ポッター魔法合戦虎落笛
櫛や赤心以て師風継ぐ

耳袋よりサウンドこぼす少女かな

神の意か木の実がわれの背を打つは

善福寺池福もて来たる小白鳥

山茶花や村に酒倉コンサート

砂時計紅茶かをらせ年暮るる

東京 佐渡谷秀一

眉寄する仁王や寒波到来す

どの部屋も変らぬ位置の新暦

生き形見とゆづる小袖や風花す

黎明の松聳えたる恵方かな

指の傷家事助けらる師走かな

岡山 間野 暎子

年賀状だけの交はり減りつ増ゆ

引き出しより亡母の文出づ煤払

日の影の移ろひ著き障子かな

東京 森澤とほる

ちらと見て食積売場通り過ぐ

カレーの香厨いつばい冬休

裏山の藤蔓編みて聖誕祭

拾得の掃けども尽きぬ落葉かな

数へ日や読み返したき本の失せ

大阪 井上昭太郎

人右往左往東京駅師走

婚前のラブレター出づ煤払

鮫鱈も硬骨魚類吾も又

埼玉 鈴木 撫足

ベタ靴が似合ふ齡や初詣

煌めける聖樹の陰の昏さかな

イスラエルへと初旅の予定立つ

余言

鈴木 榮子

然である。西洋に雪妖精の話があるのか。あればフォークである。一句に仕立てて見ると句となりちよつと発見である。そしてそれを佳しとするとところが、所謂春燈のさりげない日常に手を伸ばす詠み方であろう。当たり前といえばあたり前。詠むか詠まないかは作者の感じ方である。

しばらくは柚子湯にひとり遊びをり 市川 玲子

冬至風呂、冬至湯など同じ、冬至には南瓜を食べたり、冬の寒さを眼前に季節行事としてよいものだ。歳晚十二月を迎えるに当って、ささやかな御禊の意味とは先人のよい習わしである。

柚子湯の中で手足を伸ばして、長湯をしている時間は、全く浮世の憂さを忘れて賜った幸せなときと思える。

初芝居匂ふが如き青女房 伊東 湘三

青女房は字の通り「年若く物馴れない宮位の低い女官」であるが古典文学には出てくるが、青女房びつたりの役どころを歌舞伎の演目の中に探すと入っているだろうが、「匂ふが如き」となると美しい青女房を何々のナニとすぐには出て来ない。この句上五、中七、下五と初芝居の華やかさが溢れている。

今年国立劇場の一月三日初日に行った。

成駒屋（中村菊五郎）天王寺屋（中村富十郎）の開演前鏡割りがあった。仲間の一人に菊五郎の撒手拭が降って来てみんな喜んで。お正月の芝居はよいものだ。（以下略）

雪女フォークより嗜好みけり

菅沢 陽子

雪女は雪国の幻想のものだが、イメージが美しい雪の精を想像して、季語にまで定着している。深山の雪の中で稀に女の貌を現す造形もあるであろう。雪は積り方で色々な形を見せる。

作者はその雪女は「フォークより嗜好み」と詠う。

『北越雪譜』や『遠野物語』に出てくる雪女であるから当